

青年層における時間感覚と時間の活用に関する考察

速水聖子

1. はじめに一人間にとっての時間―

人間にとって時間とは2つの意味を持っている。

第一に、人を生物学的存在としてみると時間は個体にとっての寿命であり、一分一秒は絶対的かつ客観的な数値として誰にとっても平等に過ぎゆくものである。

現在、日本における平均寿命は男性 79 歳、女性が 86 歳くらいであり、これに照らして多くの人々は自己の過去や未来について考えるといえよう。戦後、一貫して日本人の平均寿命は伸びており、「長くなった時間」は人々のライフコースも変化させている。例えば、女性の場合、昔は結婚して 4~5 人を出産し、子育てが終了するとまもなく自分の寿命も終わるとというのが一般的であった。現在は、子育て期が終了した後の自己の人生に何をしてお過ごしかという課題や、自分の親世代の長寿化も重なって親の介護などが人生の後半における大きな問題になることも珍しいことではなくなった。さらに、結婚しない生き方や結婚しても子どもは持たない生き方が増えるなど個人の選択も多様化している。つまり、長寿化によって人生の時間が延びることは、その時間をどのように活用するか、という新たな課題を私たちにもたらしたといえる。

第二に、人を社会的存在としてみると、時間は空間としての「場」を伴って人間の生を意味づける個別主観的なものと位置づけられる。時間は絶対的な数値であるにも関わらず、個人によってその時間をどのように過ごすか、また誰とどこですごすかによって、あっという間に過ぎるように感じたり、とても長く感じたりする。また楽しい時間・つまらない時間というように、時間の意味は非常に主観的であることも事実である。前述した長寿化に伴い、長くなっている生物的時間をどのように生きるかが新たな生きがいの問題とも直結している。

以上のように、個人にとって時間がどのように意味づけられるかは長寿化とライフコースの多様化などの影響を受ける形で従来とは異なるものになっているといえよう。さらに、近年の交通網・情報機器の発達により、移動や情報伝達の高速化は時間の感じ方やとらえ方を変化させている。このような点をふまえ、本稿では現代社会における時間のとらえ方や意味づけられ方について、20~30 歳代の青年層における調査結果を紹介する。

2. 調査の位置づけと概要

若者・青年は一般的には未来の時間が豊富であり、また活動的で豊かに意味づけられる時間をもつと思われがちである。しかし、近年の社会的状況の変化は青年層における時間

感覚や時間の意味についても影響を及ぼしていると思われる。

第一に、世界的な経済不安やエネルギー危機をはじめ、国内では少子高齢化による社会保障制度のゆらぎなど、社会全体の明るい将来像を描くことが難しい状況にある。このことは、若者が未来に夢をもつという「余裕ある時間」を制限しているといえよう。つまり、将来像が不安定だからこそ未来の時間の方向性をかなり早い段階から決定することが是とされる社会的傾向が強まり、ともすれば青年以前の年齢層から自分の将来を考えさせようとする傾向が強まっている¹⁾。青年は未来に続く時間を生きる存在であるにもかかわらず、未来に対する夢や希望をもつことが難しい世の中になっていると思われる。

第二に、パソコンや携帯電話といった情報機器の発展により、現在の青年層におけるコミュニケーション手段の変化はめざましいものがある。また、パソコンや携帯電話は一家に一台ではなく一人一台が普通になり、コミュニケーション・情報発信の個人化が進むと同時に、個から発信される情報はグローバルに展開されるという側面ももっている。さらに、このことは社会関係自体のありようにも大きく関係していると思われる。現在の社会関係の結び方は、まず対面的なコミュニケーションから始まるのではなく、機器を通じたコミュニケーションから対面的関係へ移行する例も少なくない²⁾。時間と空間をどのように他者と共有するかといった点において、青年層をめぐるコミュニケーション環境は、これまでとは異なった環境にあるといえるだろう。

本稿ではこのような点を意識しつつ、青年が時間をどのように意識し、自らの生活において時間とどのように関わり、また人生における時間をどのように位置付けているかについて調査結果からの知見をまとめてみたい。ここでは、時間の意味づけを①時間の認識、②時間との関わり（受動的な時間／能動的な時間／時間の共有）、③時間の連続性のとらえ方の3つの視点に分けてみていくことにする。

なお、分析データは「青年の時間意識と健康意識に関する調査」（2010年実施）である。郵送法調査により1,600人（大阪市、岡山市、宮崎市、山口市各400人）から283票を回収した（回収率17.7%）。分析対象は年齢を回答している21～30歳までの276人である。

対象者の属性

年齢区分	度数	%	居住地	度数	%
21-25歳	24	8.7	大阪市	52	18.8
26-30歳	123	44.6	岡山市	77	27.9
31-35歳	129	46.7	山口市	98	35.5
合計	276	100	宮崎市	49	17.8
			合計	276	100

性別	度数	%
男性	96	34.8
女性	180	65.2
合計	276	100

3. 時間の認識—時間をどのように意識しているか—

まず、ここでは時間をどのようなものと感じているかについてみていこう。

「時間の大切さを感じることもあるか」については「いつも感じている」(49.1%)「時々感じる」(49.5%)であり、全体で98%が時間を大切に感じていることがわかる。この点については性差や年齢差・居住別による違いはなかった。

「無駄な時間が許せないと感じるかどうか」については「よく感じる」(8.7%)「たまに感じる」(33.8%)合わせると約43%に達しており、時間を有効に使うことへの規範意識の高さがうかがえる。また、「よく感じる」「たまに感じる」層は男性で約47%、女性では約40%と男性のほうが高く、「あまり感じない」層が男性16.7%に対して、女性30.7%である。どちらかというとな規範意識は男性のほうが高い傾向にあることがわかる($p<0.05$)。

「友達などと会う約束をしたとき時間を守っているか」についての質問では「必ず約束の時間に遅れないようにする」が全体の43.8%とかなり高い。さらに、性差や年齢・居住別にみても同様の傾向であった。ここでも時間を守ることへの規範意識の高さがみて取れる。

次に、「時間を短縮できる道具や手段は積極的に使うか」については「使う」(40%)、「たまに使う」(32.4%)であり、全体の7割が積極的に時間を短縮できるツールを活用している。前段でみたように、時間を有効に活用することや時間を守ることへの規範意識の高さが、時間の活用における積極的な合理化＝短縮できるツールの活用に結び付いているともいえよう。

生活における時間管理の方法として「スケジュール帳をよく利用しているか」についてみると、「よく利用している」(23.3%)、「時々利用している」(34.2%)となっており、5割を超える層が生活の中でスケジュール帳を利用している。

ここまでをまとめると次のとおりである。ほとんどの人にとって時間は大切なものと意識されており、無駄な時間が許せないと感じる人も全体の43%に上り、特に男性においてその傾向が強い。また、約束などの時間を必ず守るとする人も全体の43.8%であり、時間の規範意識が高い。そのためか時間短縮の道具も4割は積極的に活用しており、スケジュール帳による時間管理も利用者が約6割である。

4. 時間との関わり—時間の受動性と能動性—

次に、若者が自らの生活において時間とどのように関わっているかについてみてみよう。まず、ここでは調査票の設問において時間感覚(過ぎゆく時間をどのように感じるか)に関わるものを「時間の受動性」とし、時間活用(どのように時間をやりくりするか)に関わるものを「時間の能動性」と位置づける。それぞれについて分析結果をみてみよう。

4.1 時間の受動性

「私は毎日の生活に追われているので時間があっという間に過ぎると感じている」について、まず年代別にみると青年層でも年代が上がるにつれて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」とする割合が高い ($p<0.05$)。

表 1 時間感覚と年齢

		私は毎日の生活に追われているので時間があっという間に過ぎる				合計
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	
年齢	21~25	4 16.7%	13 54.2%	3 12.5%	4 16.7%	24 100.0%
	26~30	52 43.0%	34 28.1%	23 19.0%	12 9.9%	121 100.0%
	31~35	55 43.3%	53 41.7%	16 12.6%	3 2.4%	127 100.0%
合計		111 40.8%	100 36.8%	42 15.4%	19 7.0%	272 100.0%

「私は昔のことを思い出すことが多い」と「いま楽しい生活を送っている」のクロスでは、「いま楽しい生活を送っていると思わない」層のほうが「昔のことを思い出すことが多い」とする割合が高い ($p<0.05$)。

表 2 「いま楽しい」と「昔を思い出す」

		私はいま楽しい毎日を送っている				合計
		そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない	
私は昔のことを思い出すことが多い	そう思う	12 25.0%	19 39.6%	9 18.8%	8 16.7%	48 100.0%
	どちらかといえばそう思う	22 24.2%	49 53.8%	18 19.8%	2 2.2%	91 100.0%
	どちらかといえばそう思わない	19 20.4%	54 58.1%	16 17.2%	4 4.3%	93 100.0%
	そう思わない	19 50.0%	13 34.2%	5 13.2%	1 2.6%	38 100.0%
合計		72 26.7%	135 50.0%	48 17.8%	15 5.6%	270 100.0%

次に、「私は、いま楽しい毎日を送っている」を性別にみると、女性は「そう思う」(28.4%)、「どちらかといえばそう思う」(52.3%)、「どちらかといえばそう思わない」(16.5%)、「そう思わない」(2.6%)であるのに対して、男性は「そう思う」(24%)、「どちらかといえばそう思う」(45.8%)、「どちらかといえばそう思わない」(19.8%)、「そう思わない」(10.4%)であり、男性のほうが毎日が楽しいとは「思わない」割合が高い ($p<0.05$)。

同じ設問で世帯類型別にみると、「単独世帯」よりも「本人と未婚の子の世帯」「夫婦と

未婚の子の世帯」のほうが「そう思う」割合が高い (p<0.05)。

表3 「いま楽しい」と世帯構成

	私はいま楽しい毎日を送っている				合計	
	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかとい えばそう思わ ない	そう思わない		
世帯構成:家族員数	単独世帯	14 18.7%	40 53.3%	16 21.3%	5 6.7%	75 100.0%
	夫婦のみの世帯	6 22.2%	16 59.3%	3 11.1%	2 7.4%	27 100.0%
	本人と未婚の子の世帯	2 28.6%	3 42.9%	1 14.3%	1 14.3%	7 100.0%
	夫婦と未婚の子の世帯	35 40.2%	39 44.8%	9 10.3%	4 4.6%	87 100.0%
	その他の2世代世帯	7 17.5%	22 55.0%	10 25.0%	1 2.5%	40 100.0%
	3世代世帯	6 40.0%	9 60.0%	0 .0%	0 .0%	15 100.0%
	その他	3 15.0%	7 35.0%	9 45.0%	1 5.0%	20 100.0%
	合計	73 26.9%	136 50.2%	48 17.7%	14 5.2%	271 100.0%

さらに、暮らし向きの程度で比較すると、暮らし向きの程度を上位に位置づけるほうが「楽しい毎日を送っている」と思う割合が高い (p<0.05)。

表4 「いま楽しい」と「現在の暮らし向き」

	私はいま楽しい毎日を送っている				合計	
	そう思う	どちらかといえ ばそう思う	どちらかとい えばそう思わ ない	そう思わない		
現在の暮らし向きの程度	上の上	2 100.0%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	2 100.0%
	上の下	6 75.0%	1 12.5%	1 12.5%	0 .0%	8 100.0%
	中の上	21 32.8%	36 56.3%	7 10.9%	0 .0%	64 100.0%
	中の中	28 24.6%	64 56.1%	15 13.2%	7 6.1%	114 100.0%
	中の下	11 22.9%	21 43.8%	12 25.0%	4 8.3%	48 100.0%
	下の上	4 14.8%	11 40.7%	10 37.0%	2 7.4%	27 100.0%
	下の下	0 .0%	3 37.5%	3 37.5%	2 25.0%	8 100.0%
	合計	72 26.6%	136 50.2%	48 17.7%	15 5.5%	271 100.0%

まとめると、年齢が上がるにつれて現実の時間の経過速度を実感している。「楽しい毎日を送っている」層では「昔のことを思い出す」過去の時間を振り返る割合が少ない。さらに「楽しい毎日を送っている」として時間の経過を楽しんでいるのは女性、家族と居住していること、ある程度の暮らし向きの余裕と関連があることがわかる。

4.2 時間の能動性

次に、時間の能動性（時間の活用）についてみていこう。「規則正しい生活をしている」を年齢別でみると、年齢が高いほうが「あてはまる」とする割合が高い（ただし、統計的な有意差はみられなかった）。

表5 「規則正しい生活」と年齢

	規則正しい生活をしている				合計	
	とてもあてはまる	わりとあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない		
年齢カテ	21～25	3 12.5%	10 41.7%	8 33.3%	3 12.5%	24 100.0%
	26～30	13 10.7%	60 49.2%	33 27.0%	16 13.1%	122 100.0%
	31～35	19 15.0%	75 59.1%	22 17.3%	11 8.7%	127 100.0%
合計	35 12.8%	145 53.1%	63 23.1%	30 11.0%	273 100.0%	

続いて「規則正しい生活をしている」と「計画的に仕事をする」「毎日が楽しい」についてそれぞれクロスをみていこう。

まず「規則正しい生活をしている」と「計画的に仕事をする」のクロスでは「規則正しい生活をしている」ほうが「計画的に仕事をする」とする割合が高い ($p<0.05$)。

表6 「規則正しい生活」と「計画的に仕事をする」

	規則正しい生活をしている				合計	
	とてもあてはまる	わりとあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない		
計画的に仕事をする	とてもあてはまる	20 44.4%	14 31.1%	7 15.6%	4 8.9%	45 100.0%
	わりとあてはまる	15 9.9%	97 63.8%	29 19.1%	11 7.2%	152 100.0%
	あまりあてはまらない	0 .0%	32 47.1%	25 36.8%	11 16.2%	68 100.0%
	まったくあてはまらない	0 .0%	2 25.0%	2 25.0%	4 50.0%	8 100.0%
合計	35 12.8%	145 53.1%	63 23.1%	30 11.0%	273 100.0%	

次に、「規則正しい生活をしている」と「毎日が楽しい」のクロスでは「規則正しい生活をしている」ほうが「毎日が楽しい」とする割合が高い ($p<0.05$)。

表7 「規則正しい生活」と「毎日が楽しい」

		規則正しい生活をしている				合計
		とてもあてはまる	わりとあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
毎日が楽しい	とてもあてはまる	13 36.1%	14 38.9%	6 16.7%	3 8.3%	36 100.0%
	わりとあてはまる	18 11.4%	96 60.8%	30 19.0%	14 8.9%	158 100.0%
	あまりあてはまらない	4 6.2%	29 44.6%	24 36.9%	8 12.3%	65 100.0%
	まったくあてはまらない	0 .0%	6 42.9%	3 21.4%	5 35.7%	14 100.0%
合計		35 12.8%	145 53.1%	63 23.1%	30 11.0%	273 100.0%

さらに、「毎日が楽しい」と「時間を無駄に使っていると感じる」とのクロスをみると、「毎日が楽しい」とする層では「時間を無駄に使っているとは感じない」とする割合が高く、逆に「時間を無駄に使っていると感じる」層では「毎日が楽しいとはあてはまらない」とする割合が高いことがわかる ($p<0.05$)。

表8 「毎日が楽しい」と「時間を無駄に使っている」

		時間を無駄に使っていると感じる				合計
		とてもあてはまる	わりとあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
毎日が楽しい	とてもあてはまる	3 8.3%	10 27.8%	14 38.9%	9 25.0%	36 100.0%
	わりとあてはまる	13 8.2%	68 43.0%	66 41.8%	11 7.0%	158 100.0%
	あまりあてはまらない	15 23.1%	28 43.1%	18 27.7%	4 6.2%	65 100.0%
	まったくあてはまらない	4 28.6%	6 42.9%	4 28.6%	0 .0%	14 100.0%
合計		35 12.8%	112 41.0%	102 37.4%	24 8.8%	273 100.0%

ここまでの結果をまとめよう。「規則正しい生活をしている」のは、青年でもより年齢が高い層である傾向がみられる。「規則正しい生活」をしていることは「計画的に仕事をする」、「毎日が楽しい」と関連がある。「毎日が楽しい」ことは「時間を無駄に使っていると感じない」と関連がある。

4.3 時間の共有

本稿の冒頭に述べたように、個人と時間との関わりは「場」を伴う社会的なものとしてとらえることができる。すなわち、「ある時間」を誰と過ごすかによって、個人にとってそ

の時間の意味は異なるものになる。また、誰のために使う時間なのかによっても、その時間の意味は違ったものになるといえる。

ここでは、時間の共有について2つの設問の分析からみてみよう。まず、「一日のうち、好きな時間帯はどのような時間帯か」についての単純集計をみると「家族一緒に過ごしている時間」と「自分の部屋で趣味に費やしている時間」がともに21.7%で並んでいる。趣味の時間は一人ですぐすであろうと予想できるため、好きな時間帯は「一人で過ごす時間」と「家族と過ごす時間」に二分されることが分かる。続いて「寝ている時間」(10.9%)、「友達との語らいの時間」「好きな人と一緒にいる時間」(10%)、「食事の時間」(8.1%)と続いている。

好きな時間帯について男女別にみると、女性は「家族一緒に過ごしている時間」の割合が最も高い(23.2%)のに対して、男性は「自分の部屋で趣味に費やしている時間」が37.1%と最も高くなっている ($p<0.05$)。

表9 好きな時間帯と性別

		性別		合計
		男性	女性	
好きな時間帯	家族一緒に過ごしている時間	13 18.6%	35 23.2%	48 21.7%
	食事の時間	6 8.6%	12 7.9%	18 8.1%
	団体活動などで活動している時間	1 1.4%	2 1.3%	3 1.4%
	友達との語らいの時間	7 10.0%	15 9.9%	22 10.0%
	自分の部屋で趣味に費やしている時間	26 37.1%	22 14.6%	48 21.7%
	好きなテレビを見ている時間	2 2.9%	9 6.0%	11 5.0%
	寝ている時間	4 5.7%	20 13.2%	24 10.9%
	好きな人と一緒にいる時間	5 7.1%	17 11.3%	22 10.0%
	買い物をしている時間	1 1.4%	4 2.6%	5 2.3%
	その他	5 7.1%	15 9.9%	20 9.0%
	合計	70 100.0%	151 100.0%	221 100.0%

同じく、世帯類型別にみると、単独世帯では「趣味に費やしている時間」と「寝ている時間」の割合が高いのに対し、夫婦と未婚の子の世帯では「家族一緒に過ごしている時間」が37.8%と圧倒的に高くなっている。

表 10 好きな時間帯と世帯構成

	世帯構成 家族員数							合計
	単独世帯	夫婦のみの世帯	本人と未婚の子の世帯	夫婦と未婚の子の世帯	その他の2世代世帯	3世代世帯	その他	
好きな時間帯 家族一緒に過ごしている時間	4 6.6%	5 23.8%	1 16.7%	28 37.8%	3 11.1%	4 28.6%	3 16.7%	48 21.7%
食事の時間	9 14.8%	1 4.8%	0 .0%	4 5.4%	2 7.4%	0 .0%	2 11.1%	18 8.1%
団体活動などで活動している時間	1 1.6%	0 .0%	0 .0%	0 .0%	1 3.7%	0 .0%	1 5.6%	3 1.4%
友達との語らいの時間	9 14.8%	1 4.8%	1 16.7%	7 9.5%	4 14.8%	0 .0%	0 .0%	22 10.0%
自分の部屋で趣味に費やしている時間	11 18.0%	2 9.5%	2 33.3%	17 23.0%	6 22.2%	5 35.7%	5 27.8%	48 21.7%
好きなテレビを見ている時間	4 6.6%	2 9.5%	1 16.7%	1 1.4%	1 3.7%	0 .0%	2 11.1%	11 5.0%
寝ている時間	11 18.0%	1 4.8%	0 .0%	7 9.5%	2 7.4%	1 7.1%	2 11.1%	24 10.9%
好きな人と一緒にいる時間	7 11.5%	5 23.8%	1 16.7%	4 5.4%	3 11.1%	0 .0%	2 11.1%	22 10.0%
買い物をしている時間	1 1.6%	1 4.8%	0 .0%	1 1.4%	0 .0%	1 7.1%	1 5.6%	5 2.3%
その他	4 6.6%	3 14.3%	0 .0%	5 6.8%	5 18.5%	3 21.4%	0 .0%	20 9.0%
合計	61 100.0%	21 100.0%	6 100.0%	74 100.0%	27 100.0%	14 100.0%	18 100.0%	221 100.0%

次に、「一日の活動時間の中で、自分のために使う時間と他人(家族を含む)のために使う時間はどのくらいの比率か」について男女別にみると、男性はどちらかというと自分のために使う時間の割合が高い傾向があるが、女性は自分よりも他人(家族を含む)のために使う時間の割合が高くなっていることが分かる (p<0.05)。

表 11 「自分/他人のために使う時間」と性別

		性別		合計
		男性	女性	
自分のためと他人のために使う一日の活動時間の比率	自100% : 他0%	6 6.3%	2 1.1%	8 2.9%
	自80~90% : 他10~20%	24 25.3%	40 22.5%	64 23.4%
	自60~70% : 他30~40%	24 25.3%	31 17.4%	55 20.1%
	自50% : 他50%	14 14.7%	32 18.0%	46 16.8%
	自30~40% : 他60~70%	16 16.8%	38 21.3%	54 19.8%
	自10~20% : 他80~90%	11 11.6%	34 19.1%	45 16.5%
	自0% : 他100%	0 .0%	1 .6%	1 .4%
	合計	95 100.0%	178 100.0%	273 100.0%

ここまでの結果をまとめよう。好きな時間帯は「一人で過ごす時間」と「家族と過ごす

時間」に二分される。女性は「家族一緒に過ごしている時間」の割合が最も高く（23.2%）、男性は「自分の部屋で趣味に費やしている時間」が37.1%と最も高くなっている。単独世帯では「趣味に費やしている時間」と「寝ている時間」の割合が高いが、夫婦と未婚の子の世帯では「家族一緒に過ごしている時間」が最も高い。男性は自分のために使う時間の割合が高い傾向があるが、女性は自分よりも他人（家族を含む）のために使う時間の割合が高くなっている。

5. 時間の連続性のとらえ方

最後に時間の連続性をどのように意識しているか「これから先自分がどのようなことをしているか、想像できますか」という設問についてみてみよう。年代別にみると、より若年層において「全く想像できない」とする割合が高くなっている（統計的有意差なし）。

表 12 「これから先の自分」と年齢

		これから先自分がどのようなことをしているか想像できるか				合計
		よく想像できる	多少は想像できる	ほとんど想像できない	全く想像できない	
年齢	21~25	2 8.3%	13 54.2%	3 12.5%	6 25.0%	24 100.0%
	26~30	6 4.9%	70 56.9%	30 24.4%	17 13.8%	123 100.0%
	31~35	5 3.9%	88 68.8%	25 19.5%	10 7.8%	128 100.0%
合計		13 4.7%	171 62.2%	58 21.1%	33 12.0%	275 100.0%

「自分の将来の生活について、何か不安を感じていますか」とのクロスをみると、将来について不安を感じている層では自分の未来について「ほとんど想像できない」「全く想像できない」の割合が高くなっていることが分かる（ $p<0.05$ ）。

表 13 「これから先の自分」と「自分の将来」

		これから先自分がどのようなことをしているか想像できるか				合計
		よく想像できる	多少は想像できる	ほとんど想像できない	全く想像できない	
自分の将来の生活について何か不安を感じているか	不安を感じる	6 6.3%	41 42.7%	24 25.0%	25 26.0%	96 100.0%
	少し不安を感じる	4 3.2%	86 68.8%	28 22.4%	7 5.6%	125 100.0%
	あまり不安は感じない	1 2.6%	32 84.2%	5 13.2%	0 .0%	38 100.0%
	不安は感じない	2 16.7%	9 75.0%	1 8.3%	0 .0%	12 100.0%
	考えたことがない	0 .0%	3 75.0%	0 .0%	1 25.0%	4 100.0%
合計		13 4.7%	171 62.2%	58 21.1%	33 12.0%	275 100.0%

より若年層である方が未来の時間を生きる自分像を想像できないことが分かるとともに、

未来の自分を想像できないことが将来の不安と結び付いていることが読み取れる。

6. まとめ—調査からみる青年層における時間意識の傾向—

今回の調査結果から導き出された青年層の時間意識についての知見を最後にまとめたい。

第一に、時間意識にみる世代差（年齢による差異）の存在である。20歳代前半層とそれ以上の年齢層とでは、より高い年齢層において現実の時間速度を速く感じるとともに規則正しい生活をし、未来の自分像もイメージされている傾向にある。この背景として、より高い年齢層のほうが「いま働いている」割合が高いこと、一人暮らしの割合が低いことも考慮されるべきであろう³⁾。すなわち、20歳代後半以上のほうが仕事や家族を通じた社会参加率が高く、このことが生活における時間の受動性・能動性に影響を与えていることが指摘できよう。また、社会参加を通じた時間的拘束は現在から未来に続く時間の連続性の意識にもつながっていることも重要である。

第二の特徴として、時間意識にみる性差の存在が挙げられる。時間の規範意識は男性が高い（無駄な時間が許せない）一方で、他者との時間の共有を「好きな時間帯」として肯定的にとらえるのは女性であり、実際に活動時間における他者の存在が大きい（他者のために時間を使う）のも女性であった。今回の調査では男性のほうが一人暮らしの割合が若干高くなっていることも影響していると考えられるが、それ以上に時間意識におけるジェンダーの問題は注目されてよい。ライフコースの選択において、男性よりも女性のほうが選択肢が多い（キャリア志向あるいは専業主婦か、両立かなど）ことを考慮すると、その人生における自由度の高さが時間意識の寛容性に結びついているともいえるだろう。

最後に、このような時間意識の差異の背景はどのような点にあるのか、個人的要因・社会的要因の両方の視点から考察することは今後の課題であろう。つまり、ライフコースの選択や個々の資源の有無（社会経済的地位や経済的資源・学歴など）などの個人的要因による影響の部分と、社会状況や時代背景の違いなどの社会的要因によって及ぼされる影響の部分とがどのように時間意識に反映されているのか、について考察することが求められる。

特に、社会的要因との関わりで言えば、情報機器の発展によるコミュニケーション環境の変容がもたらす時間意識への影響について検討することが重要であると考えられる。コミュニケーションの方法や時空間のリアリティが変化する中で、他者との関係性にどのような影響があるのか、他者との関わりを時間という観点からみていくことが必要であると考えられるからである。長田は、情報処理技術の発達や移動手段の高速化によってもたらされる「日常のなかにいる他者とのパースペクティブの共有を困難にする」ことの問題点にふれている（長田 1996 : 165-169）。現代における時間的秩序の最大の問題は、高速化や仮想リアリティの経験が自然や身体のリズムに従った行為パースペクティブと乖離していることによって、他者との共有可能性の絆を失っていることであると主張する（長田 1996 : 165-169）。

ある。情報化は空間を超える他者とのつながりを可能にする一方で、日常生活という「生きられる時空間」における他者との共有のリアルな経験を難しくすることも事実である。情報化とグローバリゼーションという新たな時空間の経験の中を生きる私たちにとって、他者とどのように時間・空間を共有することができるのか、時間の社会学という視点から考察すべき課題は多い。

付記

本稿は、平成 21～23 年度科学研究費補助金基盤研究(B)「現代社会におけるスピード化と人間のリズムのズレに関する時間学的総合研究」（研究代表者：辻正二）に基づく研究成果の一部である。参加の機会をいただいた辻先生に記して感謝したい。

注

- 1) 大学教育におけるキャリア教育の隆盛はもとより、小中学生の職業体験教育などが重視されていることを見れば明らかである。
- 2) パソコンの SNS におけるオフ会（実際に会う）が代表例であるが、近年の中東でのジャスミン革命などでみられるように、機器を通じたコミュニケーションが社会運動をけん引する例もあることは注目すべきであろう。
- 3) 「いま働いている」の割合は、21～25 歳で 66.7%、26～30 歳で 82.1%、31～35 歳で 79.1%である。また、単独世帯率は 21～25 歳で 33.3%、26～30 歳で 32.8%、31～35 歳で 20.9%である。

引用文献

長田攻一「現代社会の時間」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『時間と空間の社会学』、岩波書店、1996

所属：山口大学人文学部

E-mail アドレス：seiko.h@yamaguchi-u.ac.jp